

# アートを中心に人との つながりを大切にした 教育改革を続けます

名古屋造形大学 学長 高北幸矢

まとめ／清水由佳 撮影／近藤真悟



【学長プロフィール】1950年生まれ。三重大学教育学部卒業後、大学で学生に教える傍ら、デザイン事務所を興し活躍。ニューヨーク近代美術館、チューリッヒ造形美術館など世界15カ国の美術館・教育機関に作品がコレクションされている。2005年より現職。  
【大学プロフィール】1967年名古屋造形芸術短期大学として開学。90年名古屋造形芸術大学開学。2003年大学院を開設。07年短大部の学生募集を停止し、08年名古屋造形大学に校名変更。2011年度募集は1学科(造形学科)14コース編成。

学長になってからの5年、大小含め30近くの改革プロジェクトを進めてきました。大きなところでは、大学名の変更と、学科・コースの再編成。さらには、コンテンポラリーアートや能・狂言、直木賞作家など、様々な分野で活躍する人を招いての「スーパーレクチャー」、地域の病院と協働でアート活動を展開する「やさしい美術」など、学内、学外で、アートを中心に学生に様々な人とのつながりや、活動のきっかけを作れるようなプロジェクトを実施してきました。

私たちの改革は、今までの大学や教育において時代からずれているところを修正し、芸術系大学として本来に社会に求められていることは何か、学生が求めていることは何かに向きあつてきた結果です。

アートは「生活が潤った先にあるもの」というとらえ方をされることがありますが、そうではありません。苦しいときほど人はアートに安らぎを感じたり、希望を見いだしたりする。辛いときにひとつの曲や絵が心の支えになった経験をもつ方は多いと思います。

ラスコー洞窟の壁画はその典型です。彼らは決して豊かな生活をしていただけではないのに、あれだけ見事な壁画を

残している。つまり、人の生の根本にアートはあるのです。そういうことを、高校生にもわかつてほしくて全国で講演もしています。

これは、本学の建学の精神でもある親鸞聖人の「同朋精神」にもつながります。人が生きるうえでの柔らかな考え方。他の生も、わが生も同じく敬い、「『共なるいのち』を生きる」ためにアートの果たす役割があるはず。改革プロジェクトもその思いと密接につながっています。ここから、「生物多様性キャンパス」という構想も生まれました。多様なものを受け入れる精神の息づく環境の中で、さらなる創造意欲を燃やし、かけがえないことを4年間かけて学んでほしいと考えています。

改革を進めるうえで、もう一つ念頭においていることがあります。それは、以前たまたま手にした秋元康さんの本の中にあつた「みんなが行く野原にイチゴはない」という言葉。みんながやるからといって真似しても、何も掴めない。そのとおりだと思えます。他校がやっているからではなく、建学の精神に立ち返ること、本学の学生にとって何が大切か、とことん突き詰めていくことが大事だと考えています。